

富山大学人文学部令和 6 年度卒業論文

SNS の対個人メッセージ機能と大学生の友人関係構築

富山大学人文学部人文学科

社会文化コース社会学分野

氏名 大坪 晏羽

〈目次〉

|                |    |
|----------------|----|
| 第1章 問題関心       | 1  |
| 第2章 先行研究       | 2  |
| 第3章 調査         |    |
| 第1節 調査対象者について  | 4  |
| 第2節 調査内容       | 6  |
| 第4章 分析         |    |
| 第1節 DMでのやりとり   | 8  |
| 第2節 LINEでのつながり | 10 |
| 第3節 実際に会う      | 11 |
| 第5章 考察         | 12 |

## 第1章 問題関心

スマートフォンの普及により、近年 SNS は人間関係を築く上で重要なツールのひとつになっている。特に若者の SNS 利用率は高く、その中でも LINE、Instagram、X（旧 Twitter）は個人のメッセージのやりとりにおいても多く利用されている。私の周りでは、見知らぬ人や知ってはいるが関わりのない人と Instagram や X（旧 Twitter）を交換し DM で会話を始め、そこから LINE の友達になり友人関係を築いていくというケースが多くみられる。そこで、特に見知らぬ人に対しての大学生の友人関係構築において、Instagram や X（旧 Twitter）の DM、LINE はどのように機能しているのかを調査していきたい。

## 第2章 先行研究

高谷（2017）は、2010年以降さらに進化したソーシャルメディアと若者たちのコミュニケーション行動を観察し分析するため「ソーシャルメディア利用調査」を行った。調査概要は以下の通りだ。所属学科の1年生と2年生（女子のみ）のうち175名にウェブアンケートを依頼し、そのうち106人から回答を得た。この結果と他の大学生を対象に行われたアンケート結果を比較した。

インターネットについて以下のように記述されている。

インターネットは〈つながり〉を生み出すメディアである。この場合の〈つながり〉には2種類があり、見知らぬ人々との出会いによるつながりと、既存の友人関係を維持するためのつながりである。

また、知らない人からDMや友達申請がくることに対して以下のように述べられている。

日本社会では帰属集団に対する「ウチ」の意識が強いために「ウチの者」と「ヨソ者」という差別意識が尖鋭化する傾向があるという。学生たちは「高校の同級生」「地元の幼なじみ」「大学での友達」「アルバイト先の同僚」「サークルの仲間」「いつメン（親友グループ）」などといった複数のコミュニティ（「ウチ」）に所属し、それぞれのメンバーとの文脈に適したメディアやTwitterアカウント、LINEグループ等を使い分けて多様な「ウチ」を維持している。その結果、見知らぬ「ヨソ者」がRT、いいね！、DM、友達申請、フォローなどの形で出現すると、彼女たちは強い警戒心を抱き、怖れに近い感情すら覚えてしまうのである。

先行研究から、ソーシャルメディアは不特定多数のユーザの〈つながり〉メリットとしているはずだが、多くの学生は未知のユーザとの接触を「怖い」「気持ちが悪い」と感じていると筆者は述べている。また、日本社会で生きる人は「ウチ」の意識が強いため、見知らぬ人からDMやフォロー申請などがくると強い警戒心を抱くことがある。

以上のことから、Instagram、X（旧Twitter）、LINEなどのSNSの使用率が多い若者でも見知らぬ人からのDMやフォローリクエストがくこと、見知らぬ人にDMやフォローリクエストを送ることに対して強い警戒心や抵抗感があるのではないかと考えられる。そこで、身近にいる学生を対象とするインタビュー調査で、SNSからの友人関係構築のプロセスや見知らぬ相手に対しての意識の変化について分析し、大学生の友人関係構築におい

て SNS がどのように機能しているのかを明らかにしていきたい。

## 第3章 調査

### 第1節 調査対象者について

本稿では、大学生の友人関係構築において SNS がどのように機能しているのかを明らかにするため、Instagram または X (旧 Twitter) の DM から LINE の友達になったという経験がある富山大学の学生 A さん、B さんの2名に対し調査を行った。以下は調査対象者2名のプロフィールと Instagram の利用の仕方である。

〈インタビュー어의プロフィール〉(2024 年度後期時点)

【A さん】大学4年生女性、経済学部

- ・ X (旧 Twitter) の DM から LINE の友達になった経験がある。
- ・ Instagram のフォロワー数は、メインで使っているアカウント (以下「メインアカ」) 約 350 人、サブで使っているアカウント (以下「サブアカ」) 約 70 人。

【B さん】大学4年生男性、経済学部

- ・ Instagram の DM から LINE の友達になった経験がある。
- ・ Instagram のフォロワー数は、メインアカ約 1080 人。

〈Instagram の利用の仕方〉

【A さん】

- ・ DM は平均して週に3日くらい利用する。
- ・ DM を使う日は平均して3往復くらいメッセージをやり取りする。
- ・ 仲良い人と DM をする。
- ・ Instagram のアカウントはメインアカとサブアカ両方持っており、どちらも鍵アカウントだ。それぞれの目的は、メインアカは知り合いとつながるため、サブアカは特に仲良い人とつながるためである。
- ・ メインアカのプロフィールは名前のみ書かれており、アイコンの写真はない。サブアカのプロフィールは infpt と書かれており、アイコンの写真はポケモンだ。
- ・ フォロー中的人是、ほとんど知り合い (友達の友達なども含む) で有名人も少しいる。フォロワーはほとんど知り合いである。

【B さん】

- ・ DM はほぼ毎日利用する。
- ・ DM を使う日は平均して2往復くらいメッセージをやり取りする。
- ・ 友達や先輩など知り合いと DM をする。

- ・以前は4つくらい持っていたが、3つは使えなくなり現在は1つしか持っていない。そのアカウントは公開アカウントだ。実際に使っていたのは3つで、それぞれの目的は、メインアカ、親しい友達だけのサブアカ、フランス語を学ぶためのアカウントである。現在残っているのはメインアカだ。

- ・プロフィールは名前と 02（2002 年生まれの意味）と自分の世代が書かれている。アイコンの写真は自分の服などが写ったもので、自分がどんな人なのか 1 発でわかるように心がけているそう。

- ・フォロー中的人是知り合いが多い（友達の友達なども含む）。ほとんど相互フォローをしているため、フォロワーも知り合いが多い。

## 第2節 調査内容

見知らぬ人や知ってはいるが関わりのない人と SNS を通じて友達になったという経験がある大学生 2 名（A さん、B さん）に対してインタビュー調査を行った。以下は、インタビュー調査の実施日時、方法とインタビューの主な質問内容である。

### 〈実施日時・方法〉

#### 【A さん】

1 回目 2023 年 11 月 18 日土曜日 15 時 30 分・電話

2 回目以降 LINE でのやりとり

#### 【B さん】

1 回目 2023 年 11 月 23 日木曜日 2 時 00 分・電話

2 回目以降 LINE でのやりとり

### 〈インタビューの主な質問内容〉

#### 【Instagram の利用の仕方】

- ・ Instagram の DM の平均利用日数（週）
- ・ Instagram の DM の平均メッセージ往復数
- ・ Instagram のアカウント数 など

#### 【最初の DM のやりとり】

- ・ 相手を知ったきっかけ
- ・ DM のやりとりを始めたきっかけ
- ・ DM のやりとりを始めた時期
- ・ DM をやりとりするようになる前の相手との面識の有無
- ・ 最初に DM が来た時(送った時)の気持ち など

#### 【DM のやりとりの継続】

- ・ 最初のやりとりの後の DM のやりとりの頻度
- ・ その時の話の内容
- ・ 相手に対する印象の変化の有無 など

#### 【LINE でつながる】

- ・ LINE を交換するきっかけ、または動機
- ・ LINE を交換した時期

- ・当時の LINE でのやりとりの頻度
- ・LINE でのやりとりの内容
- ・LINE でやりとりするようになってからの Instagram の DM の利用の有無（その理由）など

【実際に会う】

- ・実際に会うきっかけ、または動機
- ・実際に会った時期
- ・実際に会うときの抵抗感の有無 など

## 第4章 分析

### 第1節 DMでのやりとり

この節では、Aさん、Bさんが相手とどのようにして知り合い、どのようなDMのやりとりをしていたかについて分析する。Aさんは、X（旧 Twitter）で相手と知り合った。X（旧 Twitter）のDMでやりとりを始める以前に相手との面識はなかった。それに対してBさんは、相手と同じクラスであったため面識はあったがInstagramのDMでやりとりを始める以前に直接話したことはなかった。

Aさんは、大学入学前の高校3年生の冬に相手とつながり、その後相互フォローをして知り合ったそう。X（旧 Twitter）でDMのやりとりを始めたきっかけはお互いの「#春から富大、#経済学部」というツイートにいいねをしたことで、大学受験が終わった頃にDMのやりとりを始めた。最初は相手から軽い自己紹介と「よろしく！」というような内容のDMが送られてきたそう。そして、そのときの気持ちについては「友達をつくりたかったからうれしい」と述べていた。その後のDMでの会話は「オリエンテーション一緒に行こう」というような学校関連の内容で、毎日やりとりをするようになった。相手のDMの反応速度や内容に対しては、丁度良い反応速度であり、積極的すぎず自己紹介だけであったため好印象だったそう。相手に対して、怖くはないが陽キャそうという印象を持っており、DMを継続してもその印象に変化はなかった。DMのやりとりを継続するなかでの相手に対する見方の変化については、変化する前に直接会ったため変化する期間がなかったそう。

Bさんは、相手と同じクラスで知り合った。DMのやりとりを始めたきっかけは、相手が異性であることから同性よりも話題にできることが少なく、現実では話しかけづらいと感じたためSNSから仲良くなろうと思いDMで話しかけたことで、同じクラスになってから約半年後にDMを始めた。DMをやりとりするようになる前に面識はあったが、話したことはなく挨拶をするような関係でもなかった。最初はBさんが相手との共通の知り合いにInstagramのアカウントを聞き、フォローしてDMを送った。そのときは特に危機感などではなく「話しかけよう」という思いでDMを送ったそう。最初に送ったDMの内容は「以前会ったときに可愛いと思った」「推している」などで、それに対する反応速度は、割と早く1時間に数回のやりとりを行っていた。このような内容のDMを送った理由は、少し自分に興味を持ってもらうためにこちらから気があるような素振りを見せたかったと述べていた。相手の反応速度や内容に対して、「割と積極的」「興味を持ってくれているのではないかな？」と感じたそう。その後のDMでの会話は、趣味の話やその日の出来事などお互いについての話で、毎日やりとりをしていた。相手に対しては、元々持っていた

きれいな人という印象はあったが、DM のやりとりにおいての印象は特になかった。しかし、DM を継続するなかで同じクラスメイトから仲良い友達という印象に変わったようだ。

Aさんは、X（旧 Twitter）で相手とつながる前に面識は全くなく、相互フォローをしてお互いの「#春から富大、#経済学部」にいいねをしたことでDM のやりとりが始まった。相手と知り合うきっかけとなった「#春から〇〇大」という#は、有名で自分の大学名を入れて検索する人が多いため、同じ大学の人とつながるうえで重要な役割を担っていた。また、相手からDM が送られてきたときの気持ちについて「友達をつくりたかったからうれしい」という警戒心とは反対の気持ちであったと考えられる。

BさんはAさんとは異なり、相手と同じクラスメイトで面識はあるが直接話したことはなかった。相手が異性であることから直接話しかけづらいと感じたため、共通の知り合いを通してInstagram のアカウントを知りフォローをしてDM のやりとりを始めた。最初にDM を送ったときの内容が「以前会ったときに可愛いと思った」等の内容であるため、Bさん自身は警戒心などなかったのではないかと読み取れる。

以上のことから、AさんとBさんの相手とのつながり方は異なるがどちらもDM でのやりとりに対して強い警戒心は持っていないといえる。

## 第2節 LINEでのつながり

この節では、DMでのやりとりからLINEに移行しどのように仲を深めていったのかについて記述する。

Aさんは、相手と知り合ってからDMでのやりとりを始めてから5日目くらいには直接会うほど仲良くなっており、相手側からLINEの交換の誘いがあった。InstagramからLINEに移行する理由としてLINEの方が気軽に返せるという点があげられている。LINEを交換してからほぼ毎日やりとりをしていた。LINEでのやりとりの内容は「学食行こう」というような学校関連のものを行っていた。加えてLINEでやりとりを行うようになってからは、より仲が深まっていた。また、LINE、Instagramに関する他の機能はほとんど使用していない。例えばLINEの通話機能は待ち合わせのときのみで、日常からは使用していない。またDMもほとんど使用しておらず、その理由はAさんにとってDMは他愛のない会話を行うときに使用し、LINEは連絡事項を伝えるときに使用するイメージを持っているからだそう。

Bさんは、DMで話してから約1か月後に相手からLINEの交換の誘いがあった。DMで毎日のように話しており、インスタじゃなくてLINEでいいよねという話になり交換する流れになった。LINEに変えてからもやりとりの頻度は落ちず、毎日気づいたら返すような感じでやりとりをしていた。また、LINEを使用することになってからもDMのときと変わらず、お互いの日常を共有するようなやりとりを行いつづけ、より相手との仲が親密になった。加えて相手に対する印象も話しやすく、共感してくれる人という風に変化している。文字で会話するよりも通話をしたほうが楽であるという点からLINEでのメッセージのやりとりから通話でのやりとりに移行した。一方でInstagramのDMの使用頻度は減少し、その理由としては、LINEのほうがより親密であるイメージがあるからだと述べている。

Aさん、Bさんどちらも相手側からLINEの交換の誘いがあった。DMからLINEに移行した理由も、毎日やりとりをするためDMよりもLINEの方が気軽に返せることからLINEを使用するようになったと述べていた。さらに2人ともLINEに移行してからはDMの使用頻度が減少したが、より相手との仲が深まった、親密になった。このことから、これまで関わりのなかった相手との仲を深める手段として、DMである程度やりとりをしてLINEに移行するということは重要なことだと考えられる。

### 第3節 実際に会う

この節では、実際に会うまでの経緯や会ってからの印象の変化などについて記述する。

Aさんは、大学1年生時のオリエンテーションをきっかけにして相手と会った。オリエンテーション1日目はひとりだったため焦りを感じ、2日目は誰かに行きたいと思いX（旧Twitter）で一緒に行く人を探していたところ、やりとりをしていた相手と会うことになった。そのとき、会おうと言いだしたのは相手の方からであった。Aさんは自分がコミュ障であると感じており、相手と話せるかどうかを不安に思っていたことから実際に会うことに大きな抵抗感を持っていた。また相手がどのような人か分からないという点や、性別や年齢を詐称しているかもしれないという点で恐怖も感じていた。しかし、絵文字の使い方や「！」が多い文面から相手が女性であるという確信があった。実際に会ってみても、それまでの印象と異なるとは思わず、優しい性格だという印象を持った。そのため関係を築きやすく、仲良くなることができた。

Bさんは、学校やクラスが同じだったためDMでのやりとりを始める前から相手と面識はあったが、同じクラスで会っても話しかける勇気はなかった。DMでやりとりを始めてから約2か月後に「今度学校で話してみる？」という話をLINEでし、それがきっかけとなって学校で実際に話をした。Bさんは「暇？」「空いてる？」と問うようにして会うことを提案し、Bさんが部活の時にたまたまご飯に行くこともあった。実際に会うとき、何を話せばいいのか緊張したそうだ。会うときにはもうすでにDMで様々な話をしていたため、何を話すかについて時間をかけて考えた。会って2人で話してみるとそれまでの印象は少し変わり、相手をより大人っぽいと感じるようになった。それはDMでのやりとりでは分からなかった行動や動きが見えるようになったためだと考えている。最初にDMでやりとりを始めたときは明確に恋愛関係を望んでいたわけではなく、友達として遊びたかったと述べていた。しかし、このようにして実際に会うことで好印象となり、その後、恋愛関係に発展した。

Aさんは、自分がコミュ障であること、さらに相手と面識がなかったため相手が性別や年齢を詐称しているかもしれないことなどを不安に思い、直接会うことに対して抵抗感を持っていた。しかし、会ってみるとDMやLINEでやりとりをしていたときの印象と変わらず優しくなったため、仲良くなることができた。

Bさんは、元々相手と面識はあったが直接話したことはなかったため、DMでやりとりを始めた2か月後に直接話をするようになった。毎日のようにやりとりをしてはいたが、実際に会うときには緊張したと述べていた。実際に何度か会い、恋愛関係に発展した。

AさんとBさんでは面識があったかなかったかという違いはあるが、2人とも実際に会うときには抵抗感や緊張があった。

## 第5章 考察

高谷（2017）ではSNSでのやりとりは既存の友人関係ないしコミュニティのメンバーを対象とする〈つながり〉に限定されているということが述べられていた。しかし、AさんとBさんは特殊なケースだった。AさんはX（旧Twitter）から知り合った全く面識のない相手であるが同じ大学の同じ学部であり、Bさんは同じクラスメイトで面識はあったが直接関わりのない相手であったため、どちらもある意味では「ウチ」の人だが、相手は既存の友人関係やコミュニティのメンバーではないことから、友人関係を新規に開拓しているため高谷（2017）とは少し異なる状況であると考えられる。

Aさんは、面識のない相手からDMが送られてきたときの気持ちについて「友達をつくりたかったからうれしかった」と述べており、相手に対しては怖くはないが陽キャそうという印象を持っていた。また、BさんがDMのやりとりを始めたきっかけは、現実では話しかけづらいと感じたためSNSから仲良くなろうと思い話しかけたことで、相手に対してDMを送るとき特に危機感などはなく「話しかけよう」という思いでDMを送ったと語っていた。しかし、実際に会うとなると、Aさんは相手と話せるかどうかという不安や実際相手がどのような人か分からないし年齢などを詐称しているかもしれないという不安や恐怖を感じていた。Bさんも実際に会うとき何を話せばよいかと緊張したと述べていた。先行研究では「見知らぬ「ヨソ者」がRT、いいね！、DM、友達申請、フォローなどの形で出現すると、強い警戒心を抱き、怖れに近い感情すら覚えてしまうのである」と述べられている。しかし、AさんもBさんも面識のない見知らぬ相手からDMがくる、直接関わりのない相手にフォローリクエストやDMを送るということに対して抵抗感や警戒心などは少ないと感じる。それは、Aさんについては、相手と知り合うきっかけとなった「#春から富大、#経済学部」など「#春から〇〇大」というタグが有名だったことでそこからつながったため相手は同じ大学の学生であるという安心感が生まれたことも理由のひとつではないかと考えられる。一方で、AさんもBさんも相手と実際に会うとなると不安や恐怖、緊張といった警戒心に似た感情を持っていた。Aさんは1日目のオリエンテーションでひとりだったことに焦りを感じたことから警戒心を持ちながらも相手と会うことを決めた。また、BさんもDMからLINEに移行するまでの約1ヶ月、DMから直接話すまでの約2ヶ月という時間をかけて関係をつくっていた。このことから、DMでのやりとりを始めることに対しては先行研究で述べられているほどの強い警戒心を抱いていないが、実際に会うとなると相手が本当はどのような人であるかという不安などから警戒心を持つ場合がある。

また、X（旧Twitter）やInstagramからLINEに移行する理由として、AさんもBさんも気軽に話せることや親密なイメージがあるということを挙げている。実際に二人ともLINEに移行してやりとりを続けたことでさらに仲が深まったと述べている。その際、X（旧Twitter）やInstagramの投稿やストーリーズなどへの「いいね」といった反応だけで

は相手との接近が進まないし、かといって LINE でのやりとりはある程度親密な関係が実現してからだととらえられている。したがって、X (Twitter)、Instagram と LINE の間をつなぐ手段として DM が利用されていると考えられる。そして A さんと B さんの場合は、X (旧 Twitter)、Instagram、LINE の使い分けに関して、先行研究で述べられているように「ウチ」を維持しているというわけではなく、面識のない、またはまだあまり仲良くない相手を「ウチの者」に取り入れようとするために使い分けをしているのではないかと考えられる。

この調査から、高谷 (2017) とは少し異なるケースではあるが、現代の若者は見知らぬ人から DM、フォロー申請などがきたときに強い警戒心を抱くことは少ないのではないかと考えられる。しかし、見知らぬ人との DM や LINE のやりとりから実際に会うとなると高谷 (2017) で述べられていたような強い警戒心を持つようになる。先行研究と本研究でこのような違いが生じたのは、若者もスマートフォンを持っていることが当たり前になったこと、SNS がより身近なものになったことで、SNS から人とつながりやりとりをすることが当たり前になっていっていることが理由なのではないかと感じた。

参考文献

- ・高谷邦彦，2017，「ソーシャルメディアは新しいつながりを生んでいるのか？～女子学生の利用実態～」『名古屋短期大学研究紀要』（55）：13－27